



未来へつなげる

祭りは本来、神を「祀る」ということ。しかし、現代では人々を結びつける重要な役割も果たしています。今回は、古くから大切に受け継がれてきた祭りを、後世に伝えようと努力している人たちについて紹介します。まずは、「美甘夏まつり」の始まりや今について、美甘地域ふるさと振興事業実行委員会の稲田文夫会長にお話を伺いました。

「美甘夏まつり」の始まり

「美甘夏まつり」は、昭和59年に美甘村役場が「各種団体にも参加してもらい、村民みんなで盛り上げよう」と呼びかけをして始まりました。それ以前にも大字美甘の天神町には、百五十年以上の歴史がある「天神祭」があり、曜日に関係なく7月24日に宵祭り、25日に本祭りが行われてきました。役場からの呼びかけということもあって天神祭と美甘夏まつりは開催日を合わせ、毎年7月下旬の土曜日となりました。

町村合併の前までは、村役場の職員が中心となつて準備をしてくれていたこともあり、村民の多くは見物客として夜店や婦人会の踊り、子どもたちが神輿を担ぎ威勢よく練り歩く姿を楽しんでいました。村の商工会員も今よりはずつと多かつたので花火の寄附も多く集まり、盛大な花火が打ち上げられていたことを今も鮮明に覚えています。



伝える心



美甘地域ふるさと振興事業
実行委員会 会長
稲田文夫さん(黒田)

自分たちでやるという意識に
合併してからは、市役所美甘庁舎の職員が毎年のように少なくなり、「役場まかせ」では何もできず、衰退してしまうと危機感を持つ住民も増えてきました。しかしながら、なかなか「自分たちで」という意識にはなりませんでしたが、年を追うごとに各地域のコミュニティ協議会や婦人会、商工会といった各種団体からも「地域の祭りを盛り上げたい」という気運がより高まってきました。今では開催準備から片付けまでそれぞれの役割を果たすべく、皆で一生懸命汗を流しています。

美甘夏まつりは、決して派手で大きな祭りではありませんが、昔から小さな宿場町の風情ある祭りとして内外から多くの見物人やこの日を楽しみに帰省する人、出店で参加する人の笑顔で溢れています。そうした祭りを守っていくことはもちろん、その気持ちを後世に伝えていくことが私たちの使命だと思っています。

天神祭 昔と今

威勢のいい子ども神輿などで昔から地域の人たちに愛され続けてきた「天神祭」。昔は大勢の子どもたちが参加して賑やかだった伝統の祭りも、人口減少とともにかつてと同じようには行えなくなってきました。

ここでは、天神祭を後世に伝えていこうと活動を続けている天神祭保存会の米山勝美さんに、天神祭の歴史や今についてお話を伺いました。



昭和49年の天神祭 中学生が元気に神輿を担ぎ、町中を練り歩く

代々受け継がれてきた伝統と心

天神祭は、美甘村の大字美甘の天神様のお祭りです。以前は決まって7月24日に宵祭り、7月25日に本祭りが行われてきました。華道展や書道展、のど自慢大会といった催し物や、金魚すくいや多くの屋台が軒を連ね、とりわけ25日に境内で行われる子ども相撲は、家族や観客の声援で大変賑わっていました。

古くは天保十二年（1841年）に神輿を新調したという記録も残っており、その時代には祭礼が行われていたことがわかります。現在の祖师堂は、元々敷地内にあった天神堂が火災で焼失した際に合祀されたことで、破風づくりの社殿には木製の菅原道真の座像が祀っており、天神町の住民によって代々大切に守られています。

美甘の天神祭は、昔から子どもにそのほとんどを任せられた子ども祭



天神祭保存会
米山勝美さん(美甘)

りです。大人の世話役はいるものの、昔は尋常小学校の高等科の生徒、現在は中学生が中心となって祭事を切り盛りしています。灯籠やちょうちんの準備から、境内の掃除や草取り、幣づくり、寄附集めに至るまで子どもたちが行い、祭り当日も太鼓を叩く者、神輿を担ぐ者、鉾を持つ者、それに社殿にお参りに来た人に幣を渡す者とそれぞれの役割をこなしま



祭りの前、天神様の前での記念撮影



家族や観客の声援で賑わった子ども相撲

私の思い出



山口知昭さん
(美甘)

祭りの前に子ども達だけで夜遅くまでワイワイ準備していたのが、いい思い出です。祭りの日に婦人会が準備してくれたカレーが、すごくおいしかったですね。



廣岡留美子さん
(美甘)

祭りの日は浴衣を着せてもらえるので毎年楽しみにしていました。天神祭に参加できるのは男の子だけだったので、いつもうらやましかったです。



横山爲好さん
(美甘)

勝つと景品がもらえる子ども相撲がいつも楽しみでした。大勢の観衆の中で、3番抜き、5番抜きと勝ち進んでいったときは、本当に鼻高々でしたね。

昭和50年代には、まだ大字美甘だけで中学生が40〜50人はいいて、神輿も3年生になれば誰もが担げるものではない大変名誉なこと、神輿の担ぎ手に選ばれるため、昔は20日間くらいはあつた準備にも熱が入っていました。しかし、年々子どもが少なくなり、今では中学生だけでは準備が思うようにできず、神輿を出すこともできなくなってきました。今年も中学生は5人いるのみ。体の小

伝統の神輿も担ぎ手が減少

す。また祭りを通し、昔からのしきたりや上級生に従うこと、下級生を大切にすることなど、さまざまな社会勉強もして人として成長することも、この祭りが昔から地域の人々に愛され、大切に守られてきた理由だと思います。



商店の前では、「商売繁盛」「商売繁盛」と大声で練り上げる

さい中学1年生にはまだ危険なので、10人必要な担ぎ手の足りない部分は、高校生や地域の若者にも助けてもらい何とか出すことになりましたが、それでも中学生にとっては負担が大きいので、昔よりは練り歩く回数を減らしています。全てを昔の通りにはできないのは残念ですが、伝統や人々の思いを少しでも後世に伝えていきたいと思っています。



宮司の祝詞の後、「天神祭」の由来を聞き神輿が始まる
(写真一番右が、当時中学3年生の山口知昭さん)

子どもたちが受け継ぐ 天神祭や地域への思い

美甘の天神祭は、毎年子どもたちが中心となって準備をしています。徐々に人数が少なくなっていく中で、なんとか伝統を受け継いでいこうとがんばっている中学生の姿がそこにはあります。今年、最高学年の中学3年生で、小中学生をまとめて準備を進める横山貴弥さんに思いを聞きました。



幣を付けたり、鉦を飾るのは上級生の仕事

準備は子どもたち全員で

祭りには、小学校の1年生から参加しています。きつかけは元々お父さんが参加していたのもありますが、物心ついた頃からずっと祭りを見てきたし、近所の子どもたちもみんな小学生になったら参加していたので、僕も自然と参加するようになりました。

最高学年の中学3年生となった今年、下級生の指導をしながら準備を進めています。天神祭の準備は、だいたい1、2週間前から始めるんですが、小学校の低学年からちゃんど役割があつて、例えば低学年は、お宮の回りの草取りをしたり、美甘神社で上級生が作る「幣」をお堂まで運びます。「幣を運ぶ」というのは、完成した幣を何本かずつ持って運ぶだけなんですけど、僕らがそうだったよ



横山貴弥さん(美甘)

うに、待ってる間に上級生がする幣作りや鉦を飾り付ける様子を見て少しずつ覚えるのも大切なことなので、終わるまで待つように言ってます。みんな終わったらアイスクリームがもらえるとかわかってるので、それもあつて早く終わらないか覗きこみながら待つてるんですけどね。

先人の思いを受け継いでいく

中学生になると下級生の指導のほか、寄附を集めたり、賽銭箱や灯籠の和紙を張り替えたり、提灯を出したり、とにかく仕事が増えてきます。今年も中学生が5人しかいないのでどれも大変ですが、任せてもらえるようになったことが嬉しくてがんばっています。

祭り当日も、お宮に来た人に幣を渡す人、太鼓を叩く人、神輿を担ぐ人など、役割はいろいろ分かります



作業終了後は、小中学生全員で冷たいアイスクリーム



幣を付ける篠竹を伐る作業を小学生が興味津々で見学

が、どれもこれまで上級生やお父さん、おじいさん、その前からずっと続いてきたことだし、僕たちもその役目をしっかりと果たしたいと思つています。それに町の人が毎年ずつと楽しみにしている天神祭を、この先もずつと続けていけるように中学卒業後も下級生を支えて、盛り上げていきたいと思っています。

守り続けた 天神祭もこの町も大好きだから

天神祭の存続に危機感を持ち、不足する神輿の担ぎ手の声掛けや小中学生のサポートを始めた國本健太さん。そんな國本さんに天神祭への思いを伺いました。

僕が中学校を卒業した頃から、祭りに参加する小中学生が段々少なくなってきた。ここ数年は中学生が10人も集まらなくなってきました。灯籠の和紙の貼り換えや飾り付けといった祭りの準備も思うようにできなくなり、中学生だけで神輿を出すこともできなくなりました。中学生が不安に思ってるのも感じていたし、とにかく何とかしたいという思いから、高校生やOBに声掛けをして神輿の担ぎ手を探し、保存会の米山さんたちと中学生のサポートをしてきました。それでもついに「神輿を出すのはもうやめよう」という話が出てくるようになりました。

昨年の祭りの後、米山さんが参加した子どもたちに対し「来年もやりたいか？」と尋ねたところ、子どもたちから「やりたい」「やりたい

い」と元気な声が上がりました。その声に、子どもたちが心からそう思っているのが伝わってきてとても嬉しかったです。「これから先も、僕たちがこの祭りを守っていく」と強く思うようになりました。ずっと昔からこの町の人々に元気を与えてくれて、世代を超えて人々

を強い絆で結びつけてきたのがこの天神祭。僕はそんな天神祭が大好きです。だからこそ、毎年楽しみに集まってくる子どもたちや町の人の笑顔を、これから先もずっと見続けられるように、今度は僕らががんばっていきたくと思っています。

天神祭保存会